

2012年 8月16日・「秋田さきがけ」では

## 脱原発の叫び 詩の中に託す

東京電力福島第1原発の事故によって、生命が危機にさらされている。その心の叫びを詩に託した「脱原発・自然エネルギー 218人詩集」（コールサック社）が出版された。悲劇的な現実と、目指すべき未来が、さまざまな視点からつづられている。

福島県南相馬市に住み、原発の危険性を長年訴えてきた若松丈太郎さんは、原発周辺から人々が避難した風景を「神隠し」になぞらえ、「ふりむいてもだれもない／なにかが背筋をぞくっと襲う／広場にひとり立ちつくす」と書いた。

広島原発の原爆慰霊碑の言葉にちなみ、詩「繰り返された過ち」を作った上田由美子さんは、核のない社会への悲願をつづった。自然エネルギーを利用した発電への希望や、不便であっても豊かな自然に囲まれる幸福を表現した詩も集まった。

出版に際して記者会見したコールサック社代表の鈴木比佐雄さんは「原発の本質的な恐ろしさを書いてきた詩人は多い。詩人の自由な立場、さまざまな感性で作ったものを読むことに意義がある」と話した。

と紹介されています。